

エーデルワイスは盛大にため息をついて、手に持っていた紙片を執務机に置いた。

—— おかしいと思ったのよね、スノーフレークを名指しで、なんて。

エーデルワイスの元に届けられた書類の中に、「スノーフレーク様」と宛名が記された、やけに立派な封書が入っていたことに気付いたのが今日の午前中。

その差出人がバナナオーシャンの貴族であること。宛名の国名がウィンターローズになっていること。そもそも花騎士とはいえ、エーデルワイスに仕えるメイドにすぎないスノーフレークに、バナナオーシャンの貴族がどんな用事があるというのかなど、とにかく疑問がつきないままスノーフレークを呼んで手紙を手渡したのがお昼過ぎ。

そして午後の執務をしていた、そろそろ日も傾いてこようかという頃に、スノーフレークが件の封書を持って飛び込んできたのだった。

「……これ、人違い」

「人違い？」

手渡された封書の中身に目を通した瞬間に、エーデルワイスは全ての事情を悟った。

「バナナオーシャンには、とんだうつかりさんがいるみたいね」

ため息をつきながらその紙……バナナオーシャンの貴族からのパーティーの招待状……を机に置く。

招待状に書かれていたのは、ウィンターローズの花騎士、スノードロップの名前だった。それがたまたま、何かの手違いで似たような名前のスノーフレークのところに届いてしまったのだろう。

幸い、招待状に書かれている期日に余裕はある。エーデルワイスは誤って手紙の封を開けてしまった非礼を詫びる手紙をしたためると、別の使用人を呼び、事情を説明し、至急この招待状をウィンターローズのスノードロップの元へ届けてほしい、と告げた。

ひとまずの用事は済んだ。退出する使用人を見送って、小さくため息をつく。エーデルワイスは、部屋の隅で所在なげに立っているスノーフレークに目を向けた。

スノーフレークはすぐにエーデルワイスの視線に気づいたようで、

「お手を煩わせました」

小さく一礼すると、「まだ、仕事が残っていますので……」と、そそくさと部屋を出ようとした。

「ああ、待ってちょうだい」

ドアノブに手をかけたスノーフレークを、あわてて呼び止める。

「はい？」

動きを止めてこちらに目を向けたスノーフレークに、エーデルワイスは微笑みかけた。

「せっかくだから、私たちもバナナーションに行ってみない？」

「はい？」

スノーフレークの声のトーンが、一つ上がった。

害虫の討伐に領内のトラブルの解決にと、このところしばらく忙しかったのがようやく一段落し、ここ最近の時間にゆとりも出てきている。

幸いなことに害虫の発生も小康状態を保っているのので、エーデルワイスは折を見ては使用人たちに休暇を与えてはいたのだけれども、肝心な自分自身と、そしてスノー

フレークは休暇を取ることができていなかった。

「いつかは私たちも休暇を」と思っていたところにやってきたのが件の手紙。宛名間違いの手紙ではあったけれども、「バナナオーシャン」から連想される「ビーチで骨休め」という言葉は、エーデルワイスにはこれ以上ないくらい魅力的に見えたのだった。

害虫の出現は自分たちを待つてはくれない。であれば、休暇を取るのには早いに越したことはない。

……ということで、エーデルワイスは早々に、休暇の段取りを始めたのだった。

候補地の選定に宿泊施設や移動手段の確保。そして自分が不在の間に害虫の被害が発生した場合にそなえて、他の花騎士たちとのスケジュール調整など、やらなければならないことは山積している。

それに加えて貴族としての仕事に、やはり頻度は少ないとはいえ急を要する害虫討伐の依頼もやってくる。

とにかく目の回るほどに忙しい時間がしばらく続きはしたものの、それもすべては来たるべきバナナオーシャンでのバカンスのため。害虫討伐も普段の仕事も、自然、力が入るのだった。